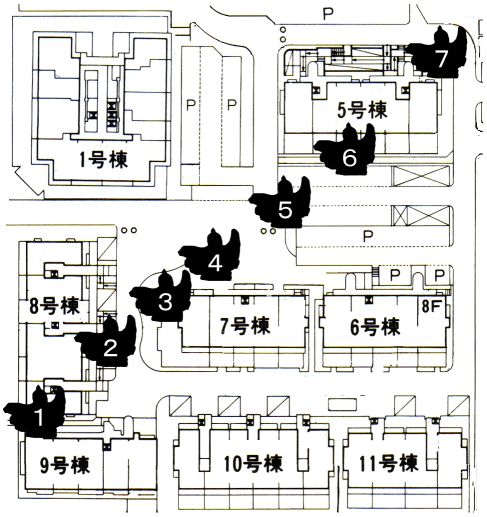
ちょっとそこまで ～お散歩日和（地域編）～
団地オブジェ（その１）



第二団地のシンボル的な存在のこの鳥について、その由来が知りたいとの要望がありました。

当時、公団でこの鳥のオブジェを担当された方からお聞きしたところでは、作者は「しずまさみ」と言い、この団地をイメージして自由に制作していただいたそうですが、記録は一切残っていないとのことでした。入居当初、当団地だけでなく、光が丘団地内のこの種のオブジェの所在を案内したチラシが配られ、それを頼りにお子さんと一緒に探索をした方がいらっしゃいました。が、それも昔のこと、記録らしいものは残っていないとの返事でした。

この鳥の所在は、まず卵、８号棟と９号棟の間の道の脇に、ただの黒い石に見えますが叩くと金属音がするからこれも作品らしい。孵化し始めた卵が８号棟玄関先の植え込みの中に、卵から雛が顔を出しているのと、幼鳥となったのと２体が管理事務所傍に、成鳥が藤棚から駐車場に抜ける階段の柱の上に、５号棟南側の細い道際に、茂みから抜け出て羽を広げて迎えてくれる１体、北東角の植え込みの中の鉄柱の上に羽ばたく姿で１体があります。そこの鉄柱に冒頭の文字が刻まれています。

遷移（METAMORPHOSE）

卵が　やがて
飛ぶなんて
なんと　不思議な

さて、こうなると気になるのは 制作者の「しずまさみ」というお方、彫刻家・美術家・造形作家で検索して数件ヒットしました。それを総合すると次のような人物像が浮かび上がります。名前は「志津雅美」、１９４０年後半の生まれ、男性、鹿児島で子供時代を過ごし、東京造形大学の出（？）、多摩地区に在住し、多摩地区の公園や街に作品が多数あり、仲間内にも公園や団地のモニュメント制作を手がけている人がいる・・・

このコラムに３人の方から情報提供頂きました。そのうちのお一人が志津雅美氏のアドレスを調べあげ、ご本人に直接メールされました。その結果、制作意図を書きしたためた長文のメールが届きました。ご紹介しましょう。

オブジェ「遷移」について

彫刻家　志津雅美

光が丘には、私の作ったものが４つあります。
赤塚光が丘公園のブロンズ少女像（１９８３）、春の風公園の園名石（１９８５）、光が丘公園の園名石（１９８８）、そして、公団団地内のオブジェ（１９９０）です。ＧＨと呼ばれていたころに少女像をつくってから、公団団地内にオブジェを作るようになるまでのわずかな間に、そこは「光が丘」になり、風景もすっかり変

わっていました。
　まさに「与時遷移、応物変化」(時のうつろいに事物も変化する)でした。
　そして、公団団地内のコモンスペースにマスコットとなるようなものをという課題に、この「遷移」「変遷」「変貌」「変化」「進化」等のイメージを使いたいと思いました。抽象的な概念をどのように表現するのか。そこは住宅地、生活の場。だから、考えました。
　それは遷移、何もなかった所に草や木が生え、そこはやがて林となり、森になっていくことと同じです。
　それは成長、人も同じようです。赤ちゃんが歩き出し、学生となり成人し、家庭をもち老いていきます。
　それは生長、植物にも似ています。種から芽が出て葉になって、大きくなって、花が咲き実がなります。
　それは変態、METAMORPHOSE、卵から出てきた芋虫がさなぎになって、蝶になって飛んでいくのと同様です。
　それは生育、丸い形の卵の殻を割って出た雛が大きくなって、やがては空を自由に飛び回る鳥のようです。

　鳥。
　鳥はどうだろうか。小さな丸い卵が、手も足も羽もない卵が、やがては空を飛ぶようになるなんて!! なんておかしなことでしょう! なんて不思議なことでしょう! これは夢？　いや、地球に生きるものの、なんと見事な知恵でしょう!　卵、雛鳥、雛鳥たち、親鳥、羽をひろげた鳥。それなら「家庭」や「家族」の感じも持たせられる。

　鳥を作ろうと決めました。

　「遷移」だけでは、物、形の変化がわかりにくいから、「METAMORPHOSE」(変態、変身、変形)も書き加えよう。この団地に生活する子どもたちにも分かってもらえるように、何か説明文も書き加えよう。

原型の石(8号棟南に今も)

　花崗岩の玉石を（この石はまだあるのかな？）卵の原型にしました。それを使って鋳造するための蝋の原型を作りました。それを割って卵の殻を作り、寄せ合わせて割れた卵の形にしました。そして、粘土で作った雛鳥や親鳥たちもあわせてブロンズで鋳造しました。

　羽をひろげた鳥は宙に浮いた感じが出るように、磨いたステンレスの柱の台座に設置したように記憶しています。　(2008/03/13)